

令和6年度
埼玉学園大学大学院
子ども教育学研究科 FD 活動報告書

令和7年5月14日
子ども教育学研究科
F D 委 員 会

目次

1	はじめに.....	1
2	FD活動に関する基本方針.....	2
2-1	FD委員会の委員構成.....	2
2-2	FD委員会の開催日及び議題.....	2
3	子ども教育学研究科教育体制.....	3
3-1	教育方針（ポリシー）.....	3
3-2	研究科長による3ポリシーの検証.....	4
3-3	教育実施体制.....	5
3-3-1	専任教員.....	5
3-3-2	客員教員.....	5
3-3-3	担当授業科目・研究指導.....	6
3-3-4	カリキュラム.....	7
3-3-5	時間割表.....	8
3-3-6	院生数.....	9
3-3-7	研究題目一覧.....	9
3-3-8	履修状況.....	10
3-3-9	定期試験.....	11
4	授業アンケート・授業報告.....	12
4-1	授業アンケート実施概要.....	12
4-2	教員の授業報告.....	12
5	研究発表会及び意見交換会.....	29
5-1	研究発表会.....	29
5-2	大学院専任教員・客員教員、大学院学生による意見交換会.....	29
5-3	専任教員による意見交換会.....	29
6	論文審査について.....	30
6-1	修士論文中間報告会.....	30
6-2	学位論文発表会及び最終試験.....	31
7	おわりに(今後に向けて).....	31
参考資料1	埼玉学園大学大学院FD委員会規程.....	32
参考資料2	学生向け授業に関するアンケート実施のお願い.....	33
参考資料3	教員の授業報告.....	34
参考資料4	中間報告会の振り返り.....	35

1 はじめに

埼玉学園大学大学院子ども教育学研究科は、平成 27 年度に開設された。その目的は、教育の理論と実践を往還しながら、自らの教育実践理論を構築できる資質と力量をもつ人材の養成であり、将来スクールリーダーとして活躍できる高度な専門的知識と技術を修得した人材の養成である。これは、本学の教育理念である「広く社会に貢献できる人材を養成」に沿うものである。

設置後第 10 年度が終了した段階で、子ども教育学研究科における大学院教育が当初の教育目標を十分達成されたかどうかを検証し、もし不十分な点があれば早急に改善を図ることにより、同研究科の教育をより充実したものにするために、令和 6 年度埼玉学園大学大学院子ども教育学研究科 F D 活動報告書を作成した。

2 FD活動に関する基本方針

子ども教育学研究科におけるFD委員会の基本方針と役割、FD委員会規程については、当初の通りで変更はない。(参考資料1)

令和6年度のFD委員会の構成員は、以下の通りである。

2-1 FD委員会の委員構成

委員等	所属・職名	氏名
委員長	FD委員長	堀田 正央
委員	子ども教育学研究科講師	石橋 優美
委員	子ども教育学研究科講師	大島真里子
委員	子ども教育学研究科講師	佐内 信之
委員	子ども教育学研究科客員教員	久保田善彦

2-2 FD委員会の開催日及び議題

令和6年度に開催された委員会の日時と議題は以下の通りである。

【令和6年度 FD委員会の開催日及び議題】

開催日	議題
令和6年 5月8日	(1) 令和5年度FD活動報告書について
令和6年 7月10日	(1) 令和6年度研究発表会の実施について (2) 令和6年度教育研究に関する意見交換会の実施について
令和6年 10月9日	(1) 令和6年度研究発表会の報告について
令和6年 11月13日	(1) 令和6年度意見交換会の報告について
令和7年 2月12日	(1) 令和7年度のFD活動について

3 子ども教育学研究科教育体制

3-1 教育方針（ポリシー）

【子ども教育学研究科修士課程】

I. 卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）

子ども教育学研究科では、学校教育において複雑化・多様化する社会背景のもとに顕在化する多様な学校教育課題に教育学的内容知識を基に課題を正確にとらえ分析し、解決方策を構築し、それを実践知力まで高め、その実践結果を評価・改善し、理論化するという研究能力と実践理論を身につけた人材の養成を目的とします。このため、学位授与のためには、次のような条件を満たす必要があります。

1. 本学の教育課程において所定の単位を修得し、以下に示す教育研究及び教育実践力を修得したと判定されること。
 - ① 教育実践の省察をもとに、主体的・継続的に学び続け、自らの教育実践理論を構築することができる力量
 - ② 教職員と協働して学校組織における教育活動を活性化させる協働力
2. 本学の教育課程において教育課題の解決に関する理論的探究と実践的研究を行い、修士論文としてまとめ口頭試問に合格すること

II. 教育課程編成・実施の方針（カリキュラムポリシー）

1. カリキュラムの編成

子ども教育学研究科では、教育に関する専門的知識や専門職としての資質・能力の向上を図り、保育・教育の創造に主体的に取り組むことのできる実践的力量を有する人材を育成するために「理論を学ぶ科目」「理論と実践を往還する科目」「自らの教育実践理論を構築する科目」を構造化し、有機的関連を図ったカリキュラムを編成しています。

2. 教育の実施体制

各授業科目を担う教員が子ども教育学における教育・研究の使命をもち、保育・教育における高度な知識と実践的力量について互いに共有し、協働体制のもと教育を進めます。

3. 教育の評価

各授業科目は本学の理念・目的に沿った目標を定め、到達目標並びに評価の基準・方法を学生に周知し、成績評価を行います。また、FD委員会、研究発表会を定期的を開催し、学生による授業評価の結果をもとにカリキュラムの評価・改善を図り、教育の質保証をします。

III. 入学者受け入れの方針（アドミッション・ポリシー）

子ども教育学研究科では、「自立と共生」を理念に豊かな教養と子供に対する深い愛情と保育・教育に対する強い使命感をもち、高度な専門的知識と教育実践的力量を有する人材の養成を目指します。そこで、次のような能力・意欲・適性を持った学生を求めます。

- ① 学部段階で培われた資質能力をもとに保育・教育に関する研究に意欲的に取り組もうとする者。
- ② 学校や地域において指導的役割を遂行できるスクールリーダーとなることを志向し、高度な実践力を修得しようとする者。

本研究科は、研究奨励目的に成績優秀な学生に選考により、最大2年間にわたり、返還のない奨学金制度を備えています。

3-2 研究科長による3ポリシーの検証

I. 卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）

ディプロマ・ポリシーにおいて示された“自らの教育実践理論を構築することができる力量”は、複雑化・多様化する教育上の諸課題を解決し、教育課程を改善していくための「教師の高度化」に対応した「教育の現場において課題を発見し解決する能力」である。また“教育活動を活性化させる協働力”は、「チームとしての学校」に対応した「他教員からも信頼を得られる高度な専門性と実践力」であり、学校の組織文化や業務内容の改善にむけて不可欠なものと言える。前者においては各特論を始めとした子ども教育学基盤科目等、後者では本研究科の特色であるチーム・ティーチングによる子ども教育学演習科目等の学修を通じ、2年間で培うことができていると考える。直近の修士生では修士論文のテーマに悩みながらも、教員や他学生との協働によって多くの知見を得、科学的根拠に基づいた修士論文を作成し、一定の教育実践理論の構築に至った。1年次春期からの開講される教育課題研究では、諸科目から得た様々な知見を包摂し、長期的視野で論文作成の方向性を見出す上で重要な役割を果たし、その成果は修士論文の内容および報告会等での活発な議論にも現れている。今後も折々の社会からの要請に応えるべく、教育課程との整合性を取りながら、より高い教育の成果の質を担保するための評価・改善を継続していきたいと考える。

II. 教育課程編成・実施の方針（カリキュラムポリシー）

本研究科の教育課程編成においては各科目が担う範囲が多岐にわたり、職業的専門性と学問的専門性が密接することで、目的やディプロマ・ポリシーとの繋がりが見えにくくなる点が危惧される。本研究科においては各科目がどのような目的でどのような資質・能力を養うものであるのかを明示するために、「理論を学ぶ科目」、「理論と実践を往還する科目」、「自らの教育実践理論を構築する科目」としてカリキュラムを構造化し、学生/教員が学びの成果を確認しやすい教育課程を編成している。特に理論と実践の往還の観点からは、各学校をはじめとした学外との連携等が不可欠である。各科目における小学校や幼児教育施設との連携や、教育課題研究の一環としての各学会や教育研究会などへの参加、実務経験者による教育実践の講話等を通じてこの点を担保している。今後も各学校や行政等との連携を深め、学校内外における多様な教育機会に触れることで教育実践理論構築に寄与する編成を企図していきたい。

III. 入学者受け入れの方針（アドミッション・ポリシー）

“保育・教育に関する研究に意欲的に取り組もうとする者”、“スクールリーダーとなることを志し、高度な実践力を修得しようとする者”の2点を意識し、入学者選抜においても教師としての展望と研究計画の内容を重視した。令和6年度の入学者は内部から4名であり、令和3年度入学者以降、外部受験者は出ていない。入学者は初等教育分野、幼児教育分野、福祉分野等の多様な進路を目指しているが、教育現場におけるダイバーシティ・マネジメントの必要性の観点からも、多様な背景に基づいた学部以前の学びを持った学生同士は、より有益な相互作用が期待できると考える。入学/進学者にはスクールリーダーへの志向と研究への十分な資質・能力を持ちながら、主体的かつ積極的に取り組む姿が見られており、アドミッション・ポリシーが適切に機能したと評価している。今後は外国籍を含んだ外部受験者の多様化が更に進むことも考えられ、アドミッション・ポリシーを遵守した公正な受け入れ態勢を維持・改善することに努めていきたい。

3-3 教育実施体制

令和6年度は、専任教員及び客員教員を併せて、17名の教員で授業・研究指導を行った。それぞれの詳細は、次の通りである。

3-3-1 専任教員

No.	氏名	職位
1	堀田 正央	研究科長
2	杉浦 浩美	教授
3	長友 大幸	教授
4	増南 太志	教授
5	森本 昭宏	教授
6	川喜田昌代	准教授
7	東元 りか	准教授
8	堀田 諭	准教授
9	石橋 優美	講師
10	大島真里子	講師
11	佐内 信之	講師
12	鈴木 健一	講師
13	千崎 美恵	講師
14	中山佳寿子	講師

合計 15 名

3-3-2 客員教員

No.	氏名	職位
1	久保田善彦	教授
2	中本 敬子	准教授
3	堀井 啓幸	教授

合計 3 名

3-3-3 担当授業科目・研究指導

各教員の担当授業は、下記の通りである。

埼玉学園大学大学院 子ども教育学研究科修士課程 授業科目及び担当教員

科目区分	科目名	担当教員	
子ども教育学講義科目	子ども教育学基盤科目	教育人間学特論	堀田 諭
		子ども発達特論	千崎 美恵
		学習心理学特論	中本 敬子
		発達障害支援特論	増南 太志
		子どもと家庭支援特論	杉浦 浩美
		学校マネジメント特論	堀井 啓幸
		多文化子ども教育特論	堀田 正央
		教育方法学特論	石橋 優美
		教育実践研究特論	鈴木 健一
		カリキュラム開発特論	久保田善彦
		教育メディア特論	—
	教科・保育内容関連科目	子どもの言葉特論（幼稚園）	中山佳寿子
		子どもの言葉特論（小学校）	佐内 信之
		子どもの環境特論	長友 大幸
		子どもの数・図形概念特論	—
		子どもの科学認識特論	長友 大幸
		子どもの造形表現特論	森本 昭宏
		子どもの音楽表現特論	東元 りか
	子どもと道徳特論	堀田 諭	
子ども教育学演習科目	小学校授業実践演習	佐内 信之	
	幼稚園教育実践演習	川喜田昌代/大島真里子	
	教材・環境開発演習	長友 大幸/森本 昭宏	
	いじめ・自殺・不登校問題演習	増南 太志/鈴木 健一	
	地域連携プロジェクト演習	堀田 正央/杉浦 浩美	
研究指導	教育課題研究Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ	堀田 正央/杉浦 浩美/長友 大幸/ 増南 太志/川喜田昌代/東元 りか/ 堀田 諭/石橋 優美/大島真里子/ 佐内 信之/鈴木 健一/千崎 美恵/ 中山佳寿子	

3-3-4 カリキュラム

本研究科の教育課程の具体的な目標は、高度な教育理論と実践的な教育方法を培い、現代の教育におけるさまざまな問題を解決する教育実践理論の構築と、質の高いコミュニケーション能力により教育活動や課題解決に向け協働できる人材の養成である。

これらの目的を達成するために、「子ども教育学講義科目群」、「子ども教育学演習科目群」、「研究指導」の3科目群で教育課程を編成した。「子ども教育学講義科目群」は、「子ども教育学基盤科目」と「教科・保育内容関連科目」から構成している。具体的な編成は以下の通りである。

【教育課程の概要 子ども教育学研究科 修士課程】

学位又は称号	修士（教育学）	学位又は研究科の分野	教育学関係
卒業要件及び履修方法		授業時間等	
「子ども教育学講義科目」の「子ども教育学基盤科目」から4科目8単位以上を選択必修、「教科・保育内容関連科目」から2科目4単位以上を選択必修。「子ども教育学演習科目」から2科目4単位以上を修得。 子ども教育学講義科目及び子ども教育学演習科目から24単位以上を修得すること。「研究指導」から6単位以上を修得すること。 合計で30単位以上を修得し、かつ、修士論文を提出し、その審査及び最終試験に合格すること。		1学年の学期区分	2学期
		1学期の授業期間	15週
		1時限の授業時間	90分

科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態		
			必修	選択	自由	講義	演習	実験実習
子ども教育学講義科目	子ども教育学基盤科目	教育人間学特論	1	2		○		
		子ども発達特論	1	2		○		
		学習心理学特論	1	2		○		
		発達障害支援特論	1	2		○		
		子どもと家庭支援特論	2	2		○		
		学校マネジメント特論	2	2		○		
		多文化子ども教育特論	2	2		○		
		教育方法学特論	1	2		○		
		教育実践研究特論	1	2		○		
		カリキュラム開発特論	1	2		○		
	教育メディア特論	2	2		○			
	教科・保育内容関連科目	子どもの言葉特論（幼稚園）	1	2		○		
		子どもの言葉特論（小学校）	1	2		○		
		子どもの環境特論	1	2		○		
		子どもの数・図形概念特論	1	2		○		
		子どもの科学認識特論	1	2		○		
子どもの造形表現特論		1	2		○			
子どもの音楽表現特論		1	2		○			
子どもと道徳特論	1	2		○				
子ども教育学演習科目	小学校授業実践演習	1	2			○		
	幼稚園教育実践演習	1	2			○		
	教材・環境開発演習	2	2			○		
	いじめ・自殺・不登校問題演習	2	2			○		
	地域連携プロジェクト演習	2	2			○		
研究指導	教育課題研究Ⅰ	1	2			○		
	教育課題研究Ⅱ	1	2			○		
	教育課題研究Ⅲ	2	2			○		
	教育課題研究Ⅳ	2	2			○		

3-3-5 時間割表

令和6年度 埼玉学園大学大学院 子ども教育学研究科時間割表

【春期】

時限	月			火			水			木			金		
	科目名	担当者	教室	科目名	担当者	教室	科目名	担当者	教室	科目名	担当者	教室	科目名	担当者	教室
1限 9:00 ~10:30							多文化子ども教育特論	堀田 正央	308	子ども発達特論	千崎 美恵	310			
2限 10:40 ~12:10	子どもと家庭支援特論	杉浦 浩美	312	子どもの言葉特論 (小学校)	佐内 信之	308	発達障害支援特論	増南 太志	311	学校マネジメント特論	堀井 啓幸	301	子どもの音楽表現特論	東元 りか	音楽
3限 13:00 ~14:30													子どもの言葉特論 (幼稚園)	中山佳寿子	312
4限 14:40 ~16:10				教育人間学特論	堀田 諭	311									
5限 16:20 ~17:50										小学校授業実践演習	佐内 信之	312			
6限 18:10 ~19:40										教材・環境開発演習	長友 森本	307 園工			

※「教育課題研究Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ」は、主指導教員、副主指導教員と院生との協議により、時間を決めて行うこととする。

集中講義

科目名	担当者	教室	日 程
カリキュラム開発特論	久保田善彦	312	8/26(月)、8/27(火)、8/28(水)の1~4時限、8/29(木)の1~3時限
学習心理学特論	中本 敬子	310	8/1(木)、8/2(金)、8/5(月)の1~5時限目

【秋期】

時限	月			火			水			木			金		
	科目名	担当者	教室	科目名	担当者	教室	科目名	担当者	教室	科目名	担当者	教室	科目名	担当者	教室
1限 9:00 ~10:30				幼稚園教育実践演習	川喜田 大島	312	地域連携 プロジェクト演習	堀田,杉浦	312						
2限 10:40 ~12:10										教育方法学特論	石橋 優美	308			
3限 13:00 ~14:30										子どもの造形表現特論	森本 昭宏	304			
4限 14:40 ~16:10	教育実践研究特論	鈴木 健一	体育館 312	子どもと道徳特論	堀田 諭	311				いじめ・自殺・ 不登校問題演習	増南,鈴木	312			
5限 16:20 ~17:50				子どもの科学認識特論	長友 大幸	307									
6限 18:10 ~19:40										子どもの環境特論	長友 大幸	307			

※「教育課題研究Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ」は、主指導教員、副主指導教員と院生との協議により、時間を決めて行うこととする。

3-3-6 院生数

今年度（令和6年5月1日現在）本学大学院に在籍する院生の詳細は、以下の通りである

総数、入試形態別人数、年齢別人数、男女別人数

① 総数 5名

② 入試形態別人数（名）

	一般選抜	学内選抜
修士課程1年	-	4
修士課程2年	-	1

③ 年齢別人数（名）

	22歳～25歳	26歳～30歳	31歳～35歳	36歳～40歳	41歳～
修士課程1年	4	-	-	-	-
修士課程2年	1	-	-	-	-

④ 男女別人数（名）

	男性	女性
修士課程1年	1	3
修士課程2年	-	1

3-3-7 研究題目一覧

<修士課程1年>

- ・長期休業終了直後の子どもの心理的ストレスの改善に向けた縦断的調査による検討
～自殺防止の糸口をつかむために～
- ・障害児の性自認と自己表現 ～障害児と性教育への新たな視点～
- ・社会科における教育内容の見直しに関する研究
- ・小学校高学年における発言の頻度・意欲の低下の要因の研究

<修士課程2年>

- ・幼少期の保護者の養育態度が青年期の自己抑制に及ぼす影響

3-3-8 履修状況

履修状況及び定期試験実施方法は、次の通りである。

【春期】

科目名	担当者	受講者数
教育人間学特論	堀田 諭	4
子ども発達特論	千崎 美恵	4
学習心理学特論	中本 敬子	4
発達障害支援特論	増南 太志	4
子どもと家庭支援特論	杉浦 浩美	1
学校マネジメント特論	堀井 啓幸	3
多文化子ども教育特論	堀田 正央	2
カリキュラム開発特論	久保田善彦	1
子どもの言葉特論（幼稚園）	中山佳寿子	1
子どもの言葉特論（小学校）	佐内 信之	3
子どもの音楽表現特論	東元 りか	1
小学校授業実践演習	佐内 信之	1
教育課題研究Ⅰ	杉浦 浩美	1
教育課題研究Ⅰ	長友 大幸	2
教育課題研究Ⅰ	増南 太志	1
教育課題研究Ⅲ	堀田 正央	1

【秋期】

科目名	担当者	受講者数
教育方法学特論	石橋 優美	4
教育実践研究特論	鈴木 健一	2
子どもの環境特論	長友 大幸	1
子どもの科学認識特論	長友 大幸	2
子どもの造形表現特論	森本 昭宏	1
子どもと道徳特論	堀田 諭	2
幼稚園教育実践演習	川喜田昌代/大島真里子	2
いじめ・自殺・不登校問題演習	増南 太志/鈴木 健一	3
教育課題研究Ⅱ	杉浦 浩美	1
教育課題研究Ⅱ	長友 大幸	2
教育課題研究Ⅱ	増南 太志	1
教育課題研究Ⅳ	堀田 正央	1

3-3-9 定期試験

【春期】

科目名	担当者	試験内容
教育人間学特論	堀田 諭	レポート
子ども発達特論	千崎 美恵	レポート
発達障害支援特論	増南 太志	レポート
子どもと家庭支援特論	杉浦 浩美	レポート
学校マネジメント特論	堀井 啓幸	レポート
多文化子ども教育特論	堀田 正央	レポート
子どもの言葉特論（幼稚園）	中山佳寿子	レポート
子どもの言葉特論（小学校）	佐内 信之	レポート
子どもの音楽表現特論	東元 りか	レポート

【秋期】

科目名	担当者	試験内容
教育方法学特論	石橋 優美	レポート
教育実践研究特論	鈴木 健一	レポート
子どもの環境特論	長友 大幸	レポート
子どもの科学認識特論	長友 大幸	レポート
子どもの造形表現特論	森本 昭宏	レポート
子どもと道徳特論	堀田 諭	レポート
幼稚園教育実践演習	川喜田昌代/大島真里子	レポート
いじめ・自殺・不登校問題演習	増南 太志/鈴木 健一	レポート

4 授業アンケート・授業報告

4-1 授業アンケート実施概要

令和6年度春期における授業を対象として6月に、秋期における授業を対象として12月に、院生への授業アンケートを実施した。対象科目は2名以上の講義科目である。

実施時期

春学期：令和6年6月24日（月）～ 7月5日（金）

秋学期：令和6年12月2日（月）～ 12月13日（金）

実施方法

春学期・秋学期ともに、Forms を用いて回収し、回答形式は、設問に対する自由記述式としている。

回答学生数

春学期：アンケート回収数 26／履修者数（延べ人数）27 （回収率 96%）

秋学期：アンケート回収数 15／履修者数（延べ人数）15 （回収率 100%）

実施結果

結果は次項からの記載内容の通りであるが、全般的にきわめて満足のいく結果を得ることができた。授業アンケート用紙は参考資料として掲載している。

4-2 教員の授業報告

教員の授業報告は、担当した科目ごとについての教員による自己評価を行ったものである。

4-2 教員の授業報告

教員の授業報告

子ども教育学研究科
職名 准教授
氏名 堀田 諭

科目名	開講時期	履修者数	学生の授業アンケート内容 (実施科目のみ記載)	教員の自己評価 (当該授業に関し、特に心掛けてきたこと、改善・工夫したこと及び特筆すべき事項)
教育人間学特論	春期	4	1. この授業を履修した理由は何ですか。 ・専修免許状取得のため。(複数回答) 2. この授業を履修して、あなたの研究にどのようなことが役に立ちましたか。 ・教育とは何なのか、何がよい教育なのか、そもそも何のために教育するのかという根本的なことについて考えることができた。 ・過去の文献から教育に関する知識を得ることが出来た。 ・自分の研究を違う視点で考えることができた。 3. 全体的に振り返って、授業には満足できましたか。 ・満足できました。(複数回答) 4. この授業について、要望があれば記入してください。 ・特になし(複数回答)	本授業は、現代的な教育現象について説明・対話・議論することができるように、教育学的な概念や歴史的な蓄積を手がかりとして検討する作法を身に付けることを目的とした。そのために本授業では、講読文献として、近年の教育現象について批判的に解説する文献、その基盤となっている歴史的・基礎的な文献、現代的な教育現象について哲学的に考察した文献を選定した。文献報告及び議論を通して、自身の置かれた社会的・教育的状況を改めて検討し、これからの教育実践・研究に向けての知見を見出すように努めた。 院生にとっては、文献報告のレジュメの作成方法や議論・発表方法の技能の習得のみならず、被教育体験を目的・内容・方法の観点から相対化したり、自身とは異なる研究方法論についても考察の対象に含めて検討したりすることで、研究の限界点と可能性を見据えつつ、今後の研究に取り組む足がかりを得られたものと考えられる。
子どもと道徳特論	秋期	2	1. この授業を履修した理由は何ですか。 ・専修免許取得のため(複数回答) 2. この授業を履修して、あなたの研究にどのようなことが役に立ちましたか。 ・子どもの身近の科学要素を学ぶことが出来た。 ・文献のまとめ方、調べ方について学ぶことができた。 3. 全体的に振り返って、授業には満足できましたか。 ・満足できた(複数回答) 4. この授業について、要望があれば記入してください。 ・特になし(複数回答)	本講義は、近年の道徳教育の動向を踏まえて、学校教育における道徳の位置とその機能の変容について考察し、新たな道徳授業の開発と実践に向けた条件について検討した。具体的には前半部で、道徳の位置づけと機能の変容について、答申や学習指導要領、道徳授業の典型事例を手がかりに、昨今の道徳の位置づけや機能の変化を概観し、開発・実践の条件について検討した。後半部では、道徳・「てつがく」の先進的な取り組みをしている小学校の実践に関する文献を報告・検討し、各章の論点をめぐって議論することで、自身の開発・実践のヒントを得ていたようである。

教員の授業報告

子ども教育学研究科
職 名 講師
氏 名 千崎 美恵

科目名	開講 時期	履修 者数	学生の授業アンケート内容 (実施科目のみ記載)	教員の自己評価 (当該授業に関し、特に心掛けてきたこと、改善・工夫したこと及び特筆すべき事項)
子ども発達特論	春期	4	<p>1. この授業を履修した理由は何ですか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・子どもの発達に興味があったから。(複数回答) ・小学校専修免許取得に必要な科目だったため ・子どもの発達に関する論文に目を向け、自分の研究したいテーマと関連づけて考えを深められたらいいなと思ったからです。 <p>2. この授業を履修して、あなたの研究にどのようなことが役に立ちましたか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・子どもの発達についての理解が深まり、様々な方面から子どもの発達について考えることができた。 ・複数の論文から自分にとっての考えを導き出すための力が身についたと感じる。 ・それぞれの状態における子どもの発達についての知識を広めることができた。 ・自分の研究テーマ(自殺)について、討論を踏まえた上で、いろいろな考えを得られることができた。自分の研究の参考になったため、とても役立ちました。 <p>3. 全体的に振り返って、授業には満足できましたか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・満足できた。(複数回答) <p>4. この授業について、要望があれば記入してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・特になし(複数回答) 	<p>子どもの発達を多角的に捉える視点を持って深く理解することを目的とした。さらに、各自が探求するテーマの問題と目的への道筋の構築を意識して展開させた。</p> <p>心理学における子と親に関する研究を紹介した後、子どもの発達に関する論文講読を行った。各自が問題意識を持った論文を提示して、作成したレジュメに沿って発表、疑問点や意見を投げかけ合い、討論を行った。発表者が提示した論文のテーマにおいて、メンバーそれぞれが注目した視点についての論文を次の授業で持ち寄り、各自が要約を発表、解説を加えながら、更に討論を重ねた。</p> <p>このプロセスを繰り返すことにより、本授業の具体的目的である</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 子どもの発達に関する主要理論や概念を理解する。 2. 子どもの発達過程とそれに影響を与える要因を理解する。 3. 現代の子どもを取り巻く発達に関わる問題を理解し、分析する視点を獲得する。 4. 子どもの発達を支えるための発達支援の方法を探る視点を獲得する。 <p>について達成できたと考えられる。</p> <p>各自が提示した論文テーマについて、メンバーが関心を持って関連論文を探し、討論を重ねることにより、文献講読の楽しさを経験するとともに、幼児教育、小学校教育に関する現状、課題、支援等についての考えを深めることができたと考えられる。</p>

教員の授業報告

子ども教育学研究科
職 名 客員教授
氏 名 中本 敬子

科目名	開講 時期	履修 者数	学生の授業アンケート内容 (実施科目のみ記載)	教員の自己評価 (当該授業に関し、特に心掛けてきたこと、改善・工夫したこと及び特筆すべき事項)
学習心理学特論	春期	4	<p>1. この授業を履修した理由は何ですか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・小学校専修免許取得のため。(複数回答) ・学部時代に受けた学習心理学が楽しかったから。 <p>2. この授業を履修して、あなたの研究にどのようなことが役に立ちましたか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・心理学に関する知識が深まった。 ・小学校の現場で子どもたちが自ら学びに向かうようにするにはどのような支援が効果的だと考えられるかについて深めることが出来た。 ・子どもの学習意欲を高めるための支援や学習方略について考えることができた。 <p>3. 全体的に振り返って、授業には満足できましたか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・満足できた。(複数回答) <p>4. この授業について、要望があれば記入してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・特になし。(複数回答) 	<p>履修者が4名と少人数であったことから、資料の読解とグループディスカッションによって授業を行った。内容としては、学習への様々なアプローチ、学習への動機づけの考え方、自己調整学習とメタ認知を主として扱った。資料をもとに、学習者としての経験や教育実習等での経験と結びつけて、学習心理学の内容の深い理解と実践に結びつけるための思考の育成とが成されるように心がけた。</p> <p>また、最終日の午後にはレポート作成準備の時間を設け、それまでの学習を各自で深め、必要に応じて授業者に質問できるようにした。</p> <p>授業の成果は、受講者からの質の高いレポートに反映されたと感じている。内容的に児童期以降の学習への比重が高くなったので、次年度以降は乳幼児期の学習の比重を上げることが課題である。</p>

教員の授業報告

子ども教育学研究科
職名 教授
氏名 増南 太志

科目名	開講時期	履修者数	学生の授業アンケート内容 (実施科目のみ記載)	教員の自己評価 (当該授業に関し、特に心掛けてきたこと、改善・工夫したこと及び特筆すべき事項)
発達障害支援特論	春期	4	<ol style="list-style-type: none"> 1. この授業を履修した理由は何ですか。 <ul style="list-style-type: none"> ・専修免許取得のため。(複数回答) ・発達障害の支援について興味があったから。 2. この授業を履修して、あなたの研究にどのようなことが役に立ちましたか。 <ul style="list-style-type: none"> ・統計の知識を得られた。 ・論文の読み方、統計について知れた。 ・障害に対する様々な知見が身についた。 ・将来、現場で出会う可能性のある児童の特性に対して、どのように対応すればいいのかを論文を通して学ぶことが出来た。 3. 全体的に振り返って、授業には満足できましたか。 <ul style="list-style-type: none"> ・満足できた。(複数回答) 4. この授業について、要望があれば記入してください。 <ul style="list-style-type: none"> ・特になし(複数回答) 	<p>発達障害等に関する論文を講読し、議論する形式で授業を実施してきた。詳細をじっくり読むというよりは、論文の全体像をとらえ、何を主張しようとしているのかを意識しながら読むことに力を入れた。</p> <p>また、論文で用いられている統計について、何のために用いられているのかを伝えるようにした。</p> <p>それぞれレジュメをしっかりと準備してきており、論文の内容をうのみにしないで疑問をもつように取り組んでいたと思われる。</p>
いじめ・自殺・不登校問題演習	秋期	3	<ol style="list-style-type: none"> 1. この授業を履修した理由は何ですか。 <ul style="list-style-type: none"> ・いじめ・自殺・不登校について興味があったから。 ・免許取得のために必要だったため。(複数回答) 2. この授業を履修して、あなたの研究にどのようなことが役に立ちましたか。 <ul style="list-style-type: none"> ・統計データを見て、今日のいじめや不登校についての状況について学ぶことができた。 ・将来現場に出た際に注意すべき点、持つべき考え等を学ぶことが出来た。 ・将来、現場に出た際に様々な問題への対応について考えることができた。 3. 全体的に振り返って、授業には満足できましたか。 <ul style="list-style-type: none"> ・満足できた(複数回答) 4. この授業について、要望があれば記入してください。 <ul style="list-style-type: none"> ・特になし(複数回答) 	<ul style="list-style-type: none"> ・いじめ・自殺・不登校に関する現状について、統計データをもとに把握するとともに、そのデータに関する疑問点や課題について議論した。また、生成 AI によるロールプレイを実施し、実践力の向上と自己理解を図った。いずれの取り組みにおいても、主体的に参加し議論することができていた。 ・いじめや不登校などに関わる文献資料をもって基本的な事柄を把握した上で、受講学生自身が直接的・間接的に経験した周囲のいじめや不登校に関わる事案について、その原因や学級・学年の他児童・生徒の当事者との関わり、担任教諭や学年教諭などの指導について情報を共有し、それらの対応について検討した。

教員の授業報告

子ども教育学研究科
職名 教授
氏名 増南 太志

科目名	開講 時期	履修 者数	学生の授業アンケート内容 (実施科目のみ記載)	教員の自己評価 (当該授業に関し、特に心掛けてきたこと、改善・工夫したこと及び特筆すべき事項)
教育課題研究Ⅰ	春期	1	※アンケート未実施科目の為、到達目標を記載。 ・発達障害に関する問題意識を高め、研究テーマを明確にする。 ・基礎文献を踏まえた独創的な研究計画を作成する。 ・修士論文に必要な独創的研究を遂行するための基礎的な力を形成する。	修士論文において、学生が研究する内容が「発達障害」とは異なるテーマとなっている。しかし、大学院の研究であるため、学生本人が意欲を持って取り組めるよう、興味関心に基づいた内容で進めている。現在のところ、研究の方向性はおおよそ定まっており、その内容に関する理論を概観していているところである。
教育課題研究Ⅱ	秋期	1	※アンケート未実施科目の為、到達目標を記載。 ・修士号請求論文の論文題目を決定する。 ・研究の骨子を明確にし、データの収集・分析を行い、部分的な論文草稿を作成する。 ・中間発表を行う。	修士論文の研究のため、研究テーマをさらに具体化し、調査計画やデータ収集を目指した。 12月時点で研究倫理審査の承認を受け、2月前半で第1研究のデータ収集を終えている。 良いペースで進めることができている。

教員の授業報告

子ども教育学研究科
職名 教授
氏名 杉浦 浩美

科目名	開講 時期	履修 者数	学生の授業アンケート内容 (実施科目のみ記載)	教員の自己評価 (当該授業に関し、特に心掛けてきたこと、改善・工夫したこと及び特筆すべき事項)
子どもと家庭支援特論	春期	1	<ul style="list-style-type: none"> ※アンケート未実施科目の為、到達目標を記載。 ・「家族」に関する最新の理論やアプローチ方法を学ぶ。 ・現代の「家族」が抱えている問題や困難について理解を深める。 ・問題を構造的に読み解く力を身につけ、支援のあり方を多角的に検討する。 ・支援者としての実践力を身につける。 	<p>今期は受講生が1名であったため、受講生の研究関心にそった文献を選択した。受講生は毎週レジュメを用意し報告するなど、負担も大きかったはずだが、最後まで熱心に取り組んでいた。ディスカッションも教員と二人となってしまったが、であるからこそ、修論執筆を想定した、かなり具体的なディスカッションを重ねることができた。今後の方向性や課題が明確になるなど、充実した授業となった。</p>
教育課題研究 I	春期	1	<ul style="list-style-type: none"> ※アンケート未実施科目の為、到達目標を記載。 ・自らの問題関心にもとづき、研究テーマを明確にする。 ・自らの立てた「問い」が学術的に耐えうるものか、オリジナリティはあるかをしっかり見極める。 ・第一次研究計画書を完成させる。 	<p>まずは研究テーマを明確にするため、関連する論文を読み報告してもらい、という形式で授業をすすめた。関連論文を読みすすめながら、研究課題を再検討し、問いと仮説の妥当性や調査実施の可能性について議論した。問題関心がある程度、固まってきたところで、先行研究レビューを書くための準備として、研究課題の領域ごとの基本文献、基本論文の収集を指示した。夏休みに収集した文献・論文を読み進めるよう、指導した。</p>
教育課題研究 II	秋期	1	<ul style="list-style-type: none"> ※アンケート未実施科目の為、到達目標を記載。 ・教育研究課題 I で作成した研究計画書を具体化していくために必要な知識やスキルを習得する。 ・調査に関する知識や技法を学び、次年度に本調査が実施できるようにする。 ・第1回修士論文中間報告会に向けた準備をする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・教育研究課題 I をふまえ、先行研究のレビュー論文を作成するための作業を中心に行った。院生には、毎回の報告と同時に、次に取り組むべき課題と読むべき論文や文献を提示することを課した。これら作業の積み重ねによって、研究の理論的枠組みや位置づけが、かなり、明確化できた。 ・調査に関しては、調査対象者とリサーチクエッションを絞り込む議論を重ねた。今後、プレ調査を行う予定である。 ・現時点までは、順調に研究が進められていると考える。

教員の授業報告

子ども教育学研究科
職名 教授
氏名 堀田 正央

科目名	開講 時期	履修 者数	学生の授業アンケート内容 (実施科目のみ記載)	教員の自己評価 (当該授業に関し、特に心掛けてきたこと、改善・工夫したこと及び特筆すべき事項)
多文化子ども教育特論	春期	2	1. この授業を履修した理由は何ですか。 ・専修免許状取得のため。(複数回答) 2. この授業を履修して、あなたの研究にどのようなことが役に立ちましたか。 ・スウェーデンのインクルーシブ教育について学ぶことができた。 ・自分の興味のあるテーマの論文を選択することができた。 3. 全体的に振り返って、授業には満足できましたか。 ・満足できた(複数回答) 4. この授業について、要望があれば記入してください。 ・特になし。(複数回答)	2名の履修者であったが、教員側が精緻化したテーマを示すのではなく、それぞれに興味がある課題を発掘し、多文化的視点でアプローチする形式を採用した。両名が交互に隔週での発表を行ったが、回数を重ねるにつれて適切な文献レビューと課題発見を行い、活発なディスカッションができたと考える。今年度は履修者の研究テーマが多文化と一定親和するものであったが、そうではないケースも今後考えられ、履修者の特性に応じた授業の内容と方法を年度毎に考えて行きたい。
教育課題研究Ⅲ	春期	1	※アンケート未実施科目の為、到達目標を記載。 ・科学的な根拠に基づいた仮説検証を行う。 ・先行研究との関係を明確にした独自性を明確にする。 ・具体的な提言に基づき教育実践に寄与し得る修士論文を完成させる。	1名の履修者であったが、教育課題研究Ⅰ・Ⅱから一貫して到達目標を踏まえて主体的に研究に取り組むことができていた。同学年の学生がおらず、自分自身で研究計画を立案するに十分な力があるからこそ、違う視点で見直す機会が十分とは言えず、主査・副査が本人の主体性を損なわない範囲で多角的なアドバイスを試みることを主眼に指導してきた。今後は具体的なデータ分析等の時期に入るため、計画上で概念的な枠組みが固まった中で、主張が先行しエビデンスと乖離することの無いように質の高い修士論文を目指すべく協同していきたい。
教育課題研究Ⅳ	秋期	1	※アンケート未実施科目の為、到達目標を記載。 ・科学的な根拠に基づいた仮説検証を行う。 ・先行研究との関係を明確にした独自性を明確にする。 ・具体的な提言に基づき教育実践に寄与し得る修士論文を完成させる。	修士論文作成において、左記到達目標と関連した先行研究の精査、エビデンスベースであること、結果をフィードバックする対象や内容が明確であることを心がけて指導してきた。学生の主体性を重視しながら、副指導教員と共に論文作成の過程における特に分析・考察について一方的な指導ではない具体的な議論を繰り返した。完成稿は修士論文として一定の質を担保しており、到達目標は概ね達成できたと考えている。

教員の授業報告

科目名	開講 時期	履修 者数	学生の授業アンケート内容 (実施科目のみ記載)	教員の自己評価 (当該授業に関し、特に心掛けてきたこと、改善・工夫したこと及び特筆すべき事項)
小学校授業実践演習	春期	1	<p>※アンケート未実施科目の為、到達目標を記載。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・幼稚園、小学校におけるカリキュラム編成の原理とその評価法が理解できる。 ・幼小連携カリキュラム開発の理論と方法についての理解ができる。 ・幼稚園小学校の年間カリキュラムを作成し、カリキュラムマネジメントを検討することができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・事前に学生に問い合わせ、特別支援の性教育に関心があることがわかる。そこで、繋がりのある特別支援学校から性教育の年間計画を取り寄せた。更に、授業者と学生が準備した関連資料も使い、性教育に関するカリキュラム・マネジメントを検討した。 ・授業資料はすべてデジタルデータである。学生のGmailをアカウントとし、用意したGoogle Classroomにて、情報共有をした。関連して、GIGAスクールに関わるカリキュラム・マネジメントおよび授業改善について議論した。

教員の授業報告

子ども教育学研究科
職 名 講師
氏 名 佐内 信之

科目名	開講 時期	履修 者数	学生の授業アンケート内容 (実施科目のみ記載)	教員の自己評価 (当該授業に関し、特に心掛けてきたこと、改善・工夫したこと及び特筆すべき事項)
子どもの言葉特論(小学校)	春期	3	<p>1. この授業を履修した理由は何ですか。 ・小学校専修免許取得のため。(複数回答)</p> <p>2. この授業を履修して、あなたの研究にどのようなことが役に立ちましたか。 ・自分にとって興味のあるテーマを深く掘り下げることができた。 ・子どもの言葉の発達や教師の言葉かけが子どもに与える影響力について知り、考えることができた。 ・自分の興味のあるものだけでなく、一緒に履修した人の興味のある論文を読むことで、自分の興味の幅を広げられた</p> <p>3. 全体的に振り返って、授業には満足できましたか。 ・満足できた(複数回答)</p> <p>4. この授業について、要望があれば記入してください。 ・特になし(複数回答)</p>	<p>学生の研究課題に合わせて、児童の読み書きに関する論文の購読を行った。毎回、院生同士の議論を行い、さらにゲストとして修了生と意見交換を行う機会も設けた。教員も含めて、多様な立場で議論する貴重な場を体験することができた。</p>

教員の授業報告

子ども教育学研究科
職 名 准教授
氏 名 東元 りか

科目名	開講 時期	履修 者数	学生の授業アンケート内容 (実施科目のみ記載)	教員の自己評価 (当該授業に関し、特に心掛けてきたこと、改善・工夫したこと及び特筆すべき事項)
子どもの音楽表現特論	春期	1	<p>※アンケート未実施科目の為、到達目標を記載。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 子どもの年齢に応じた発達と表現との関連性をふまえた音楽活動の指導法について理解することができる。 2. 音楽教育のあり方を深く学ぶとともに、教育現場における音楽活動の指導計画を立てることができる。 3. 音楽を用いた教育方法の研究や考察を理論と結びつけ、自らの教育実践・発表に応用することができる。 	<p>子育て支援センターにて親子向けの音楽活動を行う機会を設け、受講生自身が計画したことを実践し、振り返られるよう、授業計画に取り入れた。現場での体験は、受講生自身の自信に繋がると共に、今後身に着けるべき力は何か、を考えるきっかけとなったようだった。</p> <p>また、文献購読を通しては、ある点について徹底的に討論する等、様々な視点から物事を理解する、といった機会を設けた。このことは、論文執筆の考え方に繋がったと捉えられた。</p> <p>以上により、到達目標を概ね達成することができた、と考えられる。</p>

教員の授業報告

子ども教育学研究科
職名 講師
氏名 石橋 優美

科目名	開講 時期	履修 者数	学生の授業アンケート内容 (実施科目のみ記載)	教員の自己評価 (当該授業に関し、特に心掛けてきたこと、改善・工夫したこと及び特筆すべき事項)
教育方法学特論	秋期	4	<p>1. この授業を履修した理由は何ですか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・論文の読み方について学びたかったから。 ・石橋先生の授業は、論文を読む際の力が身につくと先輩から聞いたから。 <p>2. この授業を履修して、あなたの研究にどのようなことが役に立ちましたか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・論文の読み方について詳しく学ぶことができた。 ・論文を読む際の留意点や理解すべき点についての理解が深まった。 ・論文の読み方、自分の研究への活かした方について学ぶことができた。 ・研究をなり立たせるためのエッセンスを教えてくださいました。 <p>3. 全体的に振り返って、授業には満足できましたか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・満足できた (複数回答) <p>4. この授業について、要望があれば記入してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・特になし (複数回答) 	<p>本授業では、子どもに対する教育方法について、理論的な背景 (特に発達心理学、教育心理学、教授学習心理学) から理解し、検討することを目的とした。近年の実証的研究に触れ、心理学の諸分野や心理学の教科教育への応用について学ぶとともに、それらを支える教育方法に関連する心理学等の知見について学んだ。</p> <p>また、受講生が自身の研究に役立てられるよう、論文を批判的に読み解く力を養うこともねらいとした。</p> <p>授業において心掛けた点、工夫した点は以下のとおりである。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・受講生が自身の研究に関連する論文を選ぶことで、学習意欲を高め、より主体的に学べるよう工夫した。また、論文の講読を通じて、研究の背景や方法論について理解を深めるようにした。 ・論文を効果的に読み解くためのポイント (研究の目的、方法、結果の読み方など) を解説し、科学論文を的確に理解する力が身につくよう指導した。特に、研究の批判的検討や、論文を自身の研究に応用する視点を持つことを促した。 ・授業では、論文の内容を単に理解するだけでなく、批判的な視点を持ち、研究の意義や課題について議論する時間を確保した。これにより、単なる知識の獲得にとどまらず、研究の視点を広げる機会となるよう努めた。 ・議論を通じて、受講生同士が多様な視点から研究を考察できるようにした。 <p>本授業を通じて、受講生が科学論文を適切に理解し、自身の研究に活かす力を高めるきっかけとなったことを期待する。次年度以降も、受講生が心理学の諸分野や心理学の教科教育への応用について主体的に学べる環境を整え、より実践的な研究力の向上を支援していきたい。</p>

教員の授業報告

子ども教育学研究科
職 名 講師
氏 名 鈴木 健一

科目名	開講 時期	履修 者数	学生の授業アンケート内容 (実施科目のみ記載)	教員の自己評価 (当該授業に関し、特に心掛けてきたこと、改善・工夫したこと及び特筆すべき事項)
教育実践研究特論	秋期	2	<ol style="list-style-type: none"> 1. この授業を履修した理由は何ですか。 <ul style="list-style-type: none"> ・ 専修免許取得のため (複数回答) 2. この授業を履修して、あなたの研究にどのようなことが役に立ちましたか。 <ul style="list-style-type: none"> ・ 統計に対する知識の基礎が身についた。 ・ 自身の修士論文のための統計を学べた。 修士論文についてのアドバイスも頂けた。 3. 全体的に振り返って、授業には満足できましたか。 <ul style="list-style-type: none"> ・ 満足できた (複数回答) 4. この授業について、要望があれば記入してください。 <ul style="list-style-type: none"> ・ 特になし (複数回答) 	<p>本授業は、学級経営ならびに体育科指導における現代的様相から問題点を見出し、それらについての先行研究についての文献抄読から新たな知見を見出す方途を探ることを目的としていた。受講学生の要望により、本研究科では統計学に関わる内容が授業展開されておらず、また学部生時代においても受講学生が統計に関わる内容を学んでいない状況の中で、特に統計についての基礎を学びたいという申し出を受け、統計学に関わる内容について講義・演習に重点を置いた。</p> <p>受講学生によるアンケート結果からは、概ね良好なレスポンスと捉えられるが、統計は知っていることと使いこなすことでは全く異なる次元であるため、学生自身の研究の進捗を進め、個々に得たデータを用いた検討ができるとなお有意義な学びになると考える。</p>

教員の授業報告

子ども教育学研究科
職 名 教授
氏 名 長友 大幸

科目名	開講 時期	履修 者数	学生の授業アンケート内容 (実施科目のみ記載)	教員の自己評価 (当該授業に関し、特に心掛けてきたこと、改善・工夫したこと及び特筆すべき事項)
子どもの環境特論	秋期	1	<p>※アンケート未実施科目の為、到達目標を記載。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・発達に応じた自然との係りの理解や、自然体験・自然遊びなどへの展開を理解し、教材を開発して教育実践することができる。 ・身近な自然や生活と科学との係りの理解や、科学体験・科学遊びなどへの展開を理解し、教材を開発して教育実践することができる。 ・環境問題の解決と持続可能な社会へ向けた教育（ESD）との係りを理解し、広い視野で自然と子どもの係りを考えることができる。 	<p>本授業では、文献購読や模擬保育を実施するとともに、工作や実験・観察の知識および技能向上を心掛けた。また、環境に係わる際に身近な自然物とのふれあいを重視するため、室内栽培の方法の習得を図ることとした。受講生が1名であったため、学生は相談相手がおらず様々な面で苦勞したと思うが、意欲的に学習を進めレポート作り、成果の発表を行うことができ、効果的な授業を展開できたのではないかと考えている。</p>
子どもの科学認識特論	秋期	2	<ol style="list-style-type: none"> 1. この授業を履修した理由は何ですか。 <ul style="list-style-type: none"> ・専修免許取得のため（複数回答） 2. この授業を履修して、あなたの研究にどのようなことが役に立ちましたか。 <ul style="list-style-type: none"> ・子どもの身近の科学要素を学ぶことが出来た。 ・文献のまとめ方、調べ方について学ぶことができた。 3. 全体的に振り返って、授業には満足できましたか。 <ul style="list-style-type: none"> ・満足できた（複数回答） 4. この授業について、要望があれば記入してください。 <ul style="list-style-type: none"> ・特になし（複数回答） 	<p>本授業では、文献購読や模擬授業を実施するとともに、実験・観察の知識および技能向上を心掛けた。そのため教科書レベルにとらわれることなく発展的な実験も多く実施するようにした。受講生が2名であったため、学生は相談しながら意欲的に学習を進めレポート作り、成果の発表などをしっかりと行うことができていた。概ね効果的な授業を展開できたのではないかと考えている。</p>

教員の授業報告

子ども教育学研究科
職 名 教授
氏 名 長友 大幸

科目名	開講 時期	履修 者数	学生の授業アンケート内容 (実施科目のみ記載)	教員の自己評価 (当該授業に関し、特に心掛けてきたこと、改善・工夫したこと及び特筆すべき事項)
教育課題研究Ⅰ	春期	2	<ol style="list-style-type: none"> 1. この授業を履修した理由は何ですか。 <ul style="list-style-type: none"> ・ 修論作成に関して、学部時代の内容を続けようと考えていたため。 ・ 小学校専修免許取得のため。 2. この授業を履修して、あなたの研究にどのようなことが役に立ちましたか。 <ul style="list-style-type: none"> ・ 修論作成のための進め方や添削等をしていただいた。 ・ 研究の方向性を決めることができた。 3. 全体的に振り返って、授業には満足できましたか。 <ul style="list-style-type: none"> ・ 満足できた。(複数回答) 4. この授業について、要望があれば記入してください。 <ul style="list-style-type: none"> ・ 特になし(複数回答) 	<p>卒論に引き続き研究の進め方、内容の膨らませ方など、基本的なことについてディスカッションを通じて理解した。特に今後の見通しを持つことの重要性を示し、計画をいつまでにどこまで進めるのか、中間発表までに何を行い、どうするのかを意識するようにした。</p>
特別課題研究Ⅱ	秋期	2	<ol style="list-style-type: none"> 1. この授業を履修した理由は何ですか。 <ul style="list-style-type: none"> ・ 専修免許取得のため。 ・ 修士論文作成のため 2. この授業を履修して、あなたの研究にどのようなことが役に立ちましたか。 <ul style="list-style-type: none"> ・ 修士論文を進める上での自分の考えをより深めることが出来た ・ 研究内容の修正、今後の予定の決定で役に立った。 3. 全体的に振り返って、授業には満足できましたか。 <ul style="list-style-type: none"> ・ 満足できた(複数回答) 4. この授業について、要望があれば記入してください。 <ul style="list-style-type: none"> ・ 特になし(複数回答) 	<p>学生2名のそれぞれの修士論文に対する希望と考えを聞き、その内容を踏まえながら支援するように心掛けた。発表に際してはレジュメを用いたものが中心であったので、ICTを用いた発表へと発展させていきたいと考えている。</p>

教員の授業報告

子ども教育学研究科
職 名 教授
氏 名 森本 昭宏

科目名	開講 時期	履修 者数	学生の授業アンケート内容 (実施科目のみ記載)	教員の自己評価 (当該授業に関し、特に心掛けてきたこと、改善・工夫したこと及び特筆すべき事項)
子どもの造形表現特論	秋期	1	<p>※アンケート未実施科目の為、到達目標を記載。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・幼児期から児童期の表現の発達を捉え、個に対応した造形活動の指導法について理解する。 ・造形教育のあり方について深く学ぶとともに、教育現場における芸術活動の指導計画を立てる。子どもの様々な表現方法についての研究や考察を理論と結びつけ、自らの教育実践・発表に応用する。 	<p>埼玉県福祉部主催の障害者アート展作家取材を学部のゼミ生と共に行い、作品紹介文を作成した。これらは埼玉県のオンライン美術館のHPに掲載される予定である。障害者アートや医療的ケア児へのデジタル絵本に触れるなど、ICTを活用した様々な造形表現の取り組みについても理解したものとする。</p> <p>また、海外の子どもの造形表現にも着目して、ドイツ、イタリアの幼稚園・保育園の子どもの作品のドキュメンテーションやレゾエミアの取り組みを紹介。アルゼンチンやオーストラリアの子どもの絵を実際に見ながら、海外の子どもの造形の発達段階について考察した。</p>

教員の授業報告

子ども教育学研究科
職 名 准教授・講師
氏 名 川喜田昌代・大島真里子

科目名	開講 時期	履修 者数	学生の授業アンケート内容 (実施科目のみ記載)	教員の自己評価 (当該授業に関し、特に心掛けてきたこと、改善・工夫したこと及び特筆すべき事項)
幼稚園教育実践演習	秋期	2	※アンケート未実施科目の為、到達目標を記載。 ・事例や資料を検討することで幼稚園での教育成果を高める方法を考えること ・事例や資料を検討することで問題解決への的確な提案が出来ること ・模擬授業によって実践知を深めること	幼稚園教育実践演習科目であることから、幼稚園の保育の方法等について、その保育方法の一つである自由保育について事前に学び、実際に、自由保育を行っている幼稚園の保育の見学を行った。 見学を通して、自由保育の意義やその目的などを明らかにして、子どもの健やかな成長との関連性や、保育者としてのスキルの面などの検証を行った。また、ディスカッションも行い、保育とは何かについて、視野を広く学びを深められるように心がけた。

5 研究発表会及び意見交換会

大学院担当教員相互の研究交流を図るとともに、学生及び教員との意見交換の場を設け、今後の大学院の教育研究活動の活性化に資することを目的として次の研究発表会及び意見交換会を実施した。

5-1 研究発表会

日 時：令和6年9月11日(水) 11:00～12:00

場 所：埼玉学園大学3号館 5階 503 教室

参加者数：12名(専任教員12名)

内 容： 発表者：鈴木 健一 子ども教育学研究科 講師

テーマ：「動きの認識に関する研究—指導者と学習者の身体知の獲得に視点をあてて—」

5-2 大学院専任教員・客員教員、大学院学生による意見交換会

日 時：令和6年10月23日(水) 13:00～13:40

場 所：埼玉学園大学3号館 3階 311 教室

参加者数：14名(専任教員9名、大学院生5名)

内 容：

大学院生の主な意見

- ・今年度から倫理審査書類の提出が求められるようになり、研究計画を十分に練る必要がある。
- ・授業では、興味のある論文を扱ってもらうことができ、自分なりの論文の読み方を身につけることができた。また、統計に関する授業があるとよいと感じた。
- ・ボランティアや、教育現場で子どもの様子を見て検討する機会があり、勉強になった。

教員の主な意見

- ・授業の中では、それぞれ院生が関心をもったテーマについてとりあげ、それをもとに他の院生がさらに論文を持ってくるなど、互いの興味関心を共有し広げあうことができていた。
- ・論文を読む際に、ある論文から別の論文へとつながりを持たせながら読むということを意識して取り組ませた。
- ・どの院生も意欲的に取り組んでおり、十分な学びになった。

5-3 専任教員による意見交換会

日 時：令和6年10月23日(水) 13:40～14:10

場 所：埼玉学園大学3号館 3階 311 教室

参加者数：10名(専任教員10名)

内 容：

主な意見

- ・今年は大学院生が4人入学したことで、議論を中心とした大学院生らしい授業になっている。
- ・大学院生のうちに、学会発表を目指すことも考えられる一方、学会発表は修士論文の後でよいのではという意見もあり、大学院生に対してどこまで求めるか検討する必要がある。

6 論文審査について

本大学院子ども教育学研究科では、修士論文作成過程において、2年次に2回の中間報告会を実施することとしている。各個別報告の詳細は次の通りである。

6-1 修士論文中間報告会

第1回修士論文中間報告会

日 時：令和6年5月23日（木）12：10～12：40

場 所：埼玉学園大学3号館 304教室

【第1回修士論文中間報告会】

時間	内容（1人当りの発表10分・質疑10分）	
	発表者	指導教員名
12：10～12：15	研究科長挨拶	
12：15～12：35	23MC0001 保母 聡美	堀田 正央
12：35～12：40	講 評	

第2回修士論文中間報告会

日 時：令和6年10月24日（木）12：15～12：45

場 所：埼玉学園大学3号館 304教室

【第2回修士論文中間報告会】

時間	内容（1人当りの発表10分・質疑10分）	
	発表者	指導教員名
12：10～12：15	研究科長挨拶	
12：15～12：35	23MC0001 保母 聡美	堀田 正央
12：35～12：40	講 評	

6 - 2 学位論文発表会及び最終試験

実施日：令和7年2月6日（木）

学位論文発表会

時 間：15：00～15：20

場 所：埼玉学園大学3号館 304教室

【学位論文発表会】（1人当たり発表20分）

時間	発表者	指導教員名	修士論文題目
15：00～15：20	23MC0001 保母 聡美	堀田 正央	幼少期の保護者の養育態度が青年期の自己抑制に及ぼす影響

最終試験（口述）

時 間：15：40～16：00

場 所：埼玉学園大学3号館 312教室

【最終試験】（口述）

時間	氏 名
15：40～16：00	23MC0001 保母 聡美

7 おわりに(今後に向けて)

令和6年度は、令和5年度のFD活動報告をもとに、さらなる検討を加えた。先に掲げた各授業の担当教員による「教員の授業報告」及び「大学院専任教員と大学院生による意見交換会」「大学院専任教員による意見交換会」における院生と各科目担当教員、担当教員同士の話し合いをもとにした授業の振り返りによれば、「教育の理論と実践を往還しながら、自らの教育実践理論を構築できる資質と力量」の育成を目指した大学院教育が実施できたと評価できる。また、一期生は、卒業後、修士論文を発展させ、学会において研究発表を行ったり、現場の経験を基に本学学部授業において講演を行ったりなどしている。本研究科において身につけた学びの成果が研究の場や教育実践現場において活かされ、活躍していることが窺える。

今後も、客員教員を含め大学院担当教員は、将来スクールリーダーとして活躍できる高度な専門的知識と技術を修得した人材養成を目指す大学院教育の在り方を研究し、実践していく所存である。

埼玉学園大学大学院FD委員会規程

平成22年 5月12日制定

(目的及び設置)

第 1 条 本大学院に、授業内容及び教育方法を改善し、その質的充実を図るとともに、教員の教育力の向上に資すること（Faculty Development。以下「FD」という。）を目的とし、FD委員会（以下「委員会」という。）を置く。

(任 務)

第 2 条 委員会は、前条の目的を達成するため、次に掲げる事項について組織的な推進を図ることを任務とする。

- (1) FD活動の企画立案に関すること
- (2) FD活動に関する情報収集及び提供に関すること
- (3) FD活動についての評価及び報告書の作成に関すること
- (4) 学長の諮問した事項に関すること
- (5) その他大学院のFDの推進に関すること

(組 織)

第 3 条 委員会は、次の委員をもって組織する。

- (1) 研究科長
- (2) 専攻主任
- (3) 専任教員のうち、研究科委員会より選出された教員 若干名

(任 期)

第 4 条 委員の任期は2年とし、再任を妨げない。ただし、補欠の委員の任期は、前任者の残任期間とする。

(委員長)

第 5 条 委員会に委員長を置き、委員長は研究科委員会の議を経て、学長が指名する。

- 2 委員長は、委員会を招集し、その議長となる。
- 3 委員長に事故があるときは、あらかじめ委員長が指名した委員がその職務を代行する。

(会 議)

第 6 条 会議は、過半数の委員の出席がなければ議事を開き、議決することができない。

- 2 議事は、出席委員の過半数をもって決し、可否同数のときは、議長の決するところによる。

(委員以外の者の出席)

第 7 条 委員会は、必要と認めたときは、委員以外の者を会議に出席させ、意見を聴くことができる。

(事 務)

第 8 条 委員会の事務は、事務局教務課において処理する。

附 則

- 1 この規程は、平成22年4月1日から施行する。
- 2 この規程施行後、最初に就任する委員の任期は、第4条の規定にかかわらず平成23年3月31日までとする。

大学院子ども教育学研究科
授業担当教員 各位

大学院子ども教育学研究科
FD委員長 堀田 正央

学生向け授業に関するアンケート実施のお願い

埼玉学園大学大学院経営学研究科の授業につきましては、日頃より格別のご指導、ご配慮を賜り、厚く御礼申し上げます。

令和〇年度〇期の授業アンケートを下記のとおり実施することとなりました。

つきましては、アンケート実施の趣旨をご理解いただき、実施していただきたく、ここにお願い申し上げます。

ご負担をおかけいたしますが、なにとぞよろしくお願い申し上げます。

記

1. 実施期間 令和〇年〇月〇日（月）～ 〇月〇日（金）
2. 対象授業 講義科目、研究指導科目
3. 実施方法
 - ・アンケートの実施科目は、履修者が2名以上の講義科目及び研究指導科目を対象とする。
 - ・担当教員は授業開始後に10～20分回答の時間を設ける。
 - ・履修者はあらかじめ教務課より送られている専用URLにて回答を送信する。
4. 授業アンケート結果の活用
授業アンケートは集計し、FD活動報告書に掲載する。

以上

参考資料 3

教員の授業報告

子ども教育学研究科
職 名
氏 名

科目名	開講 時期	履修 者数	学生の授業アンケート内容 (実施科目のみ記載)	教員の自己評価 (当該授業に関し、特に心掛けてきたこと、改善・工夫したこと及び特筆すべき事項)

中間報告会の振り返り

埼玉学園大学大学院 子ども教育研究科

学生番号	氏名	指導教員名
中間報告会までの準備を振り返ってどのような点が反省点としてあげられますか		
論文指導についての意見は何かありますか		
中間報告会での各教員からのアドバイスは、今後の論文作成において、どのように参考になりましたか。		

※書ききれない場合は、行数を増やしていただいて構いません。